

ささやかな記憶を受け継ぐ

平和祈念公園は、沖縄戦の記録を保存し、次の世代へ記憶を受け継ぐ役割を担っています。

計画地は、各県沖縄戦関係慰靈塔エリアを抜けた先に位置し、利用者の心を休めるかのように青い海が目下へ広がっています。現在の休憩所は、赤瓦屋根と周りに設けられた石垣が沖縄の伝統住宅を思わせる立派な佇まいです。

既存の休憩所に蓄積された「記憶」を形ある「記録」として引き継ぎ、過去との対峙を通して今との繋がりを感じ、未来について考える場所としての休憩所を提案します。

計画概要	
延床面積:36m ²	
外構面積:89m ²	
- スロープ:10m ²	
- 通路:36m ²	
- 石庭:43m ²	
※既存休憩所を部分利用	



小路より建物を臨む

本計画の基本構想

1. 既存休憩所の保存・再生

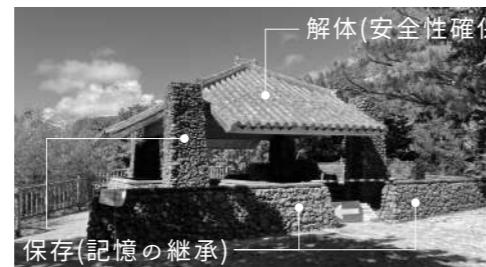
老朽化の危険がある部分は解体し、**保存・再生手法**により記録として残します。

端材は、環境への影響を考慮しながら**再利用**します。

計画の中で大事にしたこと

記憶の継承

全てを壊すのではなく、刻まれた記憶を記録として残し受け継いでいく。

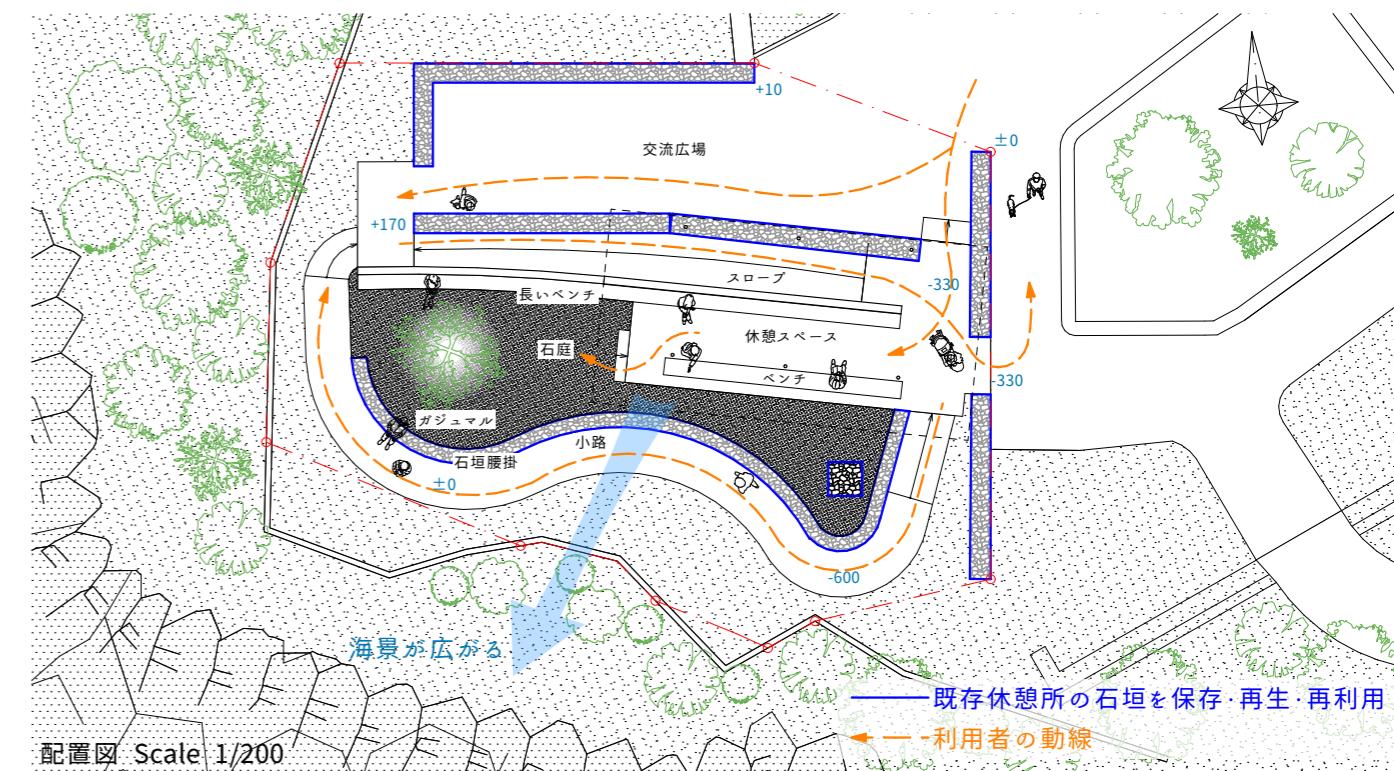


素朴に佇み風景をつくる

休憩所へかけられた片流れ屋根は、周りへ溶け込み、視線を海へ向かわせる。



配置計画



2. 誰もが利用しやすい休憩所の提案

保存・再生された部分を活かしつつ、**これから訪れる利用者が利用しやすく**、心落ち着くような休憩スペースを計画します。

3. 外構の景観創出とメンテナンス性の向上

休憩所周辺には、**石庭**を設けることで新しい景観を作り**メンテナンス性**を向上させることにより長期的な運用の負担を軽減します。

4. バリアフリーへの配慮

ご年配の方や車椅子使用者も回遊できる**小路**を設け、**バリアフリーへ配慮**します。小路を歩けば、風景が移り変わるさまを楽しむことができます。

5. 大人数の利用へ対応

敷地内には、休憩スペース以外にも**ベンチ**を設け**大人数の利用**にも対応できるよう配慮しています。

記録を通して過去とつながる

記録に残された記憶と触れ合うことにより、過去と今のつながりを感じる。





既存石垣を再利用した石垣腰掛

休憩スペースと石垣腰掛

休憩所へ設けられたベンチは、海へ向かって座れる**長いベンチ**と**内外の両方へ向かって座れるベンチ**の2つを計画しています。

また小路沿いは既存石材を再利用した石垣腰掛を設け、どこでも**自由に座れる**ようにしており、少人数から大人数まで対応できるよう配慮しています。

回遊する小路を通して、見える**景色が移り変わり**、多くのシーンを楽しむことができます。

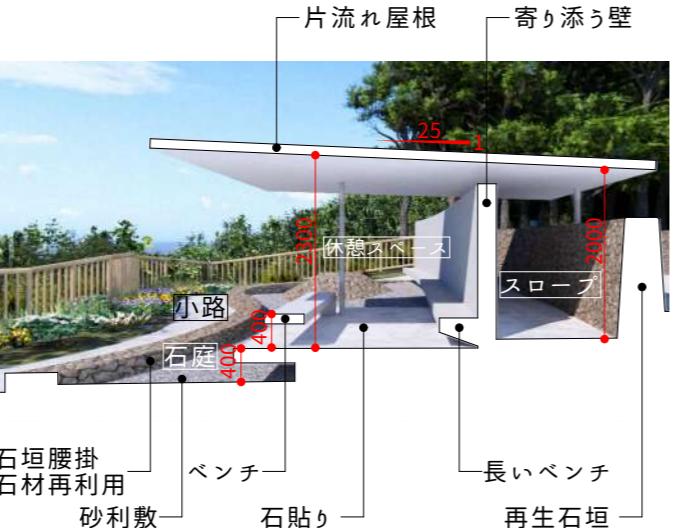


断面構成

休憩スペースFLは、石庭+400mm程度の高い位置へ設けることにより海への眺望を確保しています。ベンチと長いベンチも休憩スペースFL+400mmと設定し敷地形状に合わせて海側へ向いた段状としています。

片流れ屋根は、海側へ向かって上り勾配としており、自然と海へ視線がいざなわれる計画としています。

スロープは天井高さを低く設定しており、再生石垣との隙間のみ採光を確保ことで、少し暗い場所としました。スロープを歩きながら再生石垣に触れ、過去の記憶と対峙する空間を創出しています。



施工方法

①既存休憩所の安全性の確認

現在の休憩所は、老朽化により屋根の剥離や石垣の落下的危険があり、保存が難しい屋根部分は安全を考慮し解体を行います。

石垣部分は、構造体のコンクリートの中性化の進行度合いを確認しながら、保存方法を決定します。

②既存部分の保存及び再生

部分的な補修で対応可能な箇所はそのまま利用し、落下防止対策として石材間へモルタルを注入し本来の佇まいを損なわない方法を採用します。

部分的な補修で対応不可な箇所は、石材を残しながら解体を行い、休憩所の仕上材として再生させます。

③端材の再利用

解体時に発生した石材は土壤への影響を考慮した上、敷地内の石庭材として再利用を行います。現在の休憩所の記憶を残しながら、新しい休憩所の景観を整えます。

④新設工事

新築の休憩所は、現在の休憩所と同じ位置へ計画します。解体跡を利用した計画とすることにより、工費削減を行います。

⑤外構工事

外構工事では、園路の整備と石庭を設ける。園路は年配の方や車椅子使用者でも利用しやすいよう平坦で滑りにくい材料を使用します。

石庭は、施工及びメンテナンスが容易な砂利敷とし、長期的な運用コストの削減を行います。



休憩スペースからの眺め

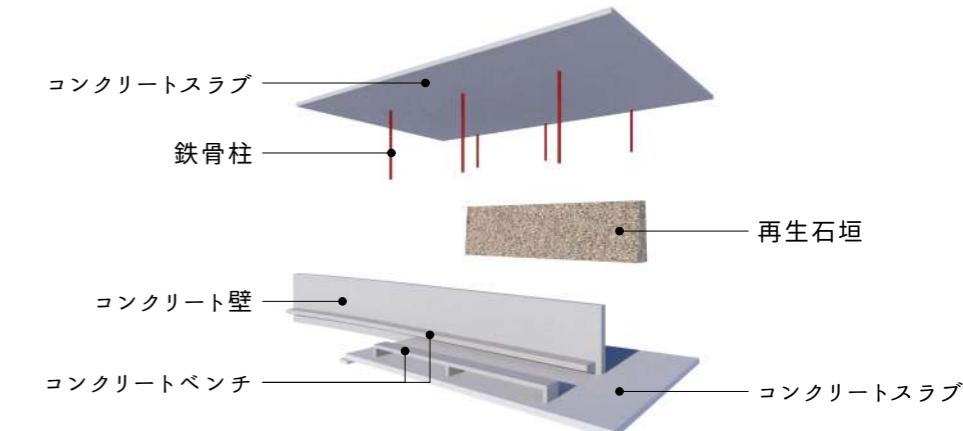


低く抑えられた片流れ屋根

構造計画

鉄骨柱とコンクリート屋根 + コンクリート壁

片流れ屋根は鉄骨柱とコンクリートスラブを採用しています。軽快な鉄骨柱がシンプルなコンクリートスラブを支える無駄のない構成としています。「寄り添う壁」は、独立したコンクリート壁としており、既存石垣の基礎位置や外構計画に併せて調整しやすいよう配慮しています。



金額調整

現地調査や既存施設を調査の上、金額調整が必要となった場合、以下の順で規模の調整や施工費の調整を想定しています。

- ①外構規模の縮小
- ②「寄り添う壁」の長さ縮小
- ③既存石垣の保存・再生方法の変更
- ④屋根面積の軽微な縮小
- ⑤その他雑工事

基本的には、小路の長さや石庭の面積、スロープ長さ等の縮小により、施工費の調整を行います。また、既存休憩所の調査結果次第では、保存・再生方法の変更や保存・解体範囲の変更等により調整致します。